

氏 名	ブノア ジャケ BENOIT JACQUET
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	工 博 第 2644 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	工 学 研 究 科 建 築 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	PRINCIPLES OF MONUMENTALITY IN TANGE KENZO'S WAY OF THINKING Study of the Architectural Discourse in Early Works (丹下健三の思考におけるモニュメンタリティの原理——初期作品の建築的 言説に関する研究——)
論文調査委員	(主 査) 教 授 高 松 伸 教 授 宗 本 順 三 教 授 門 内 輝 行

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、丹下健三の建築作品及び言説を通じた、新たな角度からのモニュメンタリティの原理と、その建築的实践に関する基礎的研究である。研究では対象を1936年～1965年の建築作品、及び言説に限定し、建築計画と建築設計の分野における抽象的な思考に関する理論的な分析に基づく基礎的研究、及び具体的な応用論を展開している。

第一章では、丹下の初期の言説（30代の著述から抜粋）の分析を通じて、「伝統」と「創造」の基本的な概念について考察し、50代、60代の丹下自身によって記された日本建築に関する著述における言説との比較を行っている。丹下の言説には、ル・コルビュジェやニーチェ、ハイデッガー、ヴァレリー等の影響を受けた近代西洋哲学者の著述の引用が見られるが、本論では丹下によるル・コルビュジェのミケランジェロとパルテノンに関する言説を、それらの原典と丹下の解釈との比較を通して分析している。この分析によって丹下が、西洋建築の起源であるパルテノンに対するル・コルビュジェの解釈を、日本建築の起源である伊勢神宮の解釈に適用したことを示すとともに、パルテノンと伊勢神宮は、ともにモニュメンタリティを体現しており、丹下がモニュメンタリティの原理を、建築の創造における基盤の一つとして捉えていたことを明らかにしている。本章では、丹下の真意が、建築の起源を理解し、現代におけるモニュメンタリティの顕現としての建築をデザインすることにあり、かつ常に「伝統」と「創造」の起源を思考しつつ、現代のモニュメンタリティを再解釈することが、丹下の創作の重要な部分を形づくっていると結論づけている。

第二章では、「大東亜建設記念計画建築設計競技応募案」（1942）の全体過程（設計競技の内容説明書から設計案まで）を対象にした、「環境」のコンセプトに関する分析、及び西田幾多郎の哲学や、前川國男の建築に関する言説との比較を通じて、丹下のモニュメンタリティについての思考の独自性を明らかにしている。大東亜建設における建築様式の主たる課題は、日本的なモニュメンタリティを建築によって創造することであり、丹下はこれを日本の古墳、及び神社の建築様式に見られるモニュメンタルな表現を参照することによって計画した。この過程における丹下のモニュメンタリティの原理とは、明らかに環境的な概念を意味しており、具体的には建築、都市計画における「統合」と「拡張」を指すものであると位置付けている。

第三章では、「伝統論」に関する思考と平行して実現された「広島ピースセンター」（1949～1956）の設計、及び建設過程における丹下の「尺度論」に関する分析を行っている。これを通じて、環境秩序形成の全体と、場所の記念碑的性格（モニュメンタリティ）との関係、即ち、具体的には、伝統、創造、環境との統合における尺度のヒエラルキー（すなわち人間尺度、社会尺度、神々尺度）と、表現との対応に関する思考の在り方、及びその具現化の手法を明らかにしている。

第四章では、第一章から第三章で明らかになったところの三つの抽象的な概念、すなわち「伝統」と「創造」の概念、「環境」の概念、「尺度論」の概念に潜在する丹下のモニュメンタリティの原理が、独自の定義によるデザインツールとアプリケーションを用いて整理できることを示している。また、それぞれの原理を、アイコン、インデックス、シンボルという丹

下のモニュメンタリティを理解するための記号を用いて、実際の設計における表現例との関係において明らかにするとともに、これらを用いた建築設計におけるモニュメンタルな手法の実践的応用の可能性を示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、丹下健三の建築作品及び言説を通した、モニュメンタリティの原理と、その建築的实践に関する新たな角度からの理論的研究であり、得られた主な成果は次のとおりである。

1. 丹下健三の初期(30代)の著述における、主として丹下独自の抽象的な概念を記述したところの言説の分析、及び50代、60代における丹下によって述べられたところの、具体的な日本建築に関する言説と、同様の主題に関する同時代の代表的な言説との比較分析を通じて、伝統と創造の関係をこれまでに無いかたちで示した。

2. コンセプトの翻訳としての建築表現の際立った事例である丹下健三のモニュメンタルな作品「大東亜建設記念計画建築設計競技応募作品」における設計内容、及びその設計趣旨を説明するところの言説と、設計の具体的内容との関係についての分析を通じて、環境秩序と設計概念の関わりとモニュメンタリティに関する基礎的な理論の枠組を示すとともに、主として建築家前川國男、及び哲学者西田幾多郎における創造に関する言説との比較を示すことによって、基礎的理論の独自性と重要性を明らかにした。

3. 伝統論を踏まえ、丹下健三の代表作品である「広島ピースセンター」の、主として建設過程における具体的な資料の分析及び比較資料との照応を通じて、設計において環境を一定のコンセプトに基づいて具体的に結合する重要な要素であるところの尺度についての一定の論理、即ち「尺度論」についての特化した分析を行い、環境秩序の総体と、モニュメンタリティの原理との対応関係について明らかにした。

4. 抽象的な概念(コンセプト)としての伝統、環境秩序、尺度と、実際の設計における表現例との関係を理論的に明らかにすることによって、建築設計におけるモニュメンタルな手法と、それらを用いることによる実践的応用の可能性を示した。

以上、要するに本論文は、建築設計とそのプロセスにおける抽象的な概念と、設計との関係を理論的に考察する方法を提案し、丹下健三の思考におけるモニュメンタリティの原理を明らかにすることを通して、その有効性を示したものであり、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって本論文は、博士(工学)の学位論文として価値あるものと認める。